2）アメリカ 7 月 10 日から 7 月 12 日　（高知 9 月 8 日から 11 日）

トロント YYZ16:45(AC526)⇒ボストン BOS18:20

トロント空港ではひやひやしたが、なんとか AC526 に搭乗できた。

ボストン空港の荷物引き取りは他の空港と異なる。通常は制限区域内に荷物引き取りがあり、国際線からは関税等の申告場所がある。しかし、制限区域外に荷物の引き取り場所があり、そのままロビーとなっている。荷物引き取り前に制限区域から出るので本当に出てよいものか迷う。カナダからでもドメスティックを利用したという扱いか。トロントで入国審査を受けたのはこの意味があるかもしれない。

空港からホテルまでは、空港快速バスを利用した。ホテルはこのバス停からすぐのところにあり、ボストンの町の中心地である。この快速バスの料金システムがよくわからず、空港からは運賃を請求されなかった。帰りも同じバスを使ったがこれは見事に請求された？？？？？

写真は、ビジネスホテルレベルに値段だけはシティーホテル並みの部屋とアメリカ人の主食？

ジョン万次郎ゆかりのフェアーヘブンに行くのに悩んだ。出発の直前まで現地ツアーを申し込んでいたが、2 名からの開催が私一人だけであった。2 名分の料金を支払えば開催はされるとのことであった。ボストンからはバスを乗り継ぎ行くことは可能であるが、あと 1 日は延泊が必要である。両者の費用の差は約 2 万円、旅行の全費用からすれば大きな金額とは言えないが、そこはしょせん貧乏人根性が抜けない。で、悩んだ挙句、貸し切りツアーとした。「先達はあらまほしけれ」この選択は正しかったと思う。一人で動くには現地でかなりの時間が必要と思われた。フェアーヘブンは素晴らしい町である、次回行くことがあれば、ツアーでなく現地で数日留まって散策をしたい。

フェアーヘブンの図書館

マークトウェイン資料

ジョン万次郎資料

ジョン万次郎トレイル

フィールド船長とその家族の墓

フィールド船長の家
（ジョン万次郎は 3 階に居住）

Whitfield-Manjiro Friendship Society, Inc.
Rooney さんと一緒に

ジョン万次郎が通った小学校

ここで、ジョン万次郎について少し触れておきたい。彼は高知県（当時は土佐）の土佐清水市は中の浜で生まれた。海に面した、後ろは崖の、ご多分に漏れず貧しい集落であったであろう。そして、14 歳の時、宇佐（現在土佐市）の漁港から漁に出たが、遭難、鳥島まで流された。その後、アメリカの捕鯨船に救出され、ホイットフィールド船長とともにアメリカにわたり、教育を受けた。そして、江戸末期日

ジョン万も訪れたかも、土佐清水 竜串海岸

本に帰り、幕末から維新にかけて大きな活躍をした人物である。ふと思いついたが、ジョン万次郎は明治維新後の 1870 年アメリカを再訪している。「八十日間世界一周」の設定年月の 2 年ほど前のことである。

今回の世界一周の訪問ポイントとしてこの地を選ぶことにはそれなりの理由があった。私がまだ小学生のころ祖母(父方)に連れられて足摺岬、竜串などを訪れたことがある。その時、祖母の生まれ故郷である中の浜も訪れた。そして、漠然とした記憶ではあるが、「此処は昔偉い人が出たところやき。」と聞いた記憶がある。その「偉い人」がジョン万次郎と分かったのは司馬遼太郎の「竜馬がゆく」を読んだ時だった。中の浜は極めて狭い集落であり、住人はほぼ親戚みたいなものであろう。私にはジョン万次郎と同じ DNA があるかもしれない。

世界一周、シーズン 1 とシーズン 2 の間、9 月 8 日から墓参りで高知に帰省をした折に中の浜を訪れた。久しぶりの足摺岬、竜串、土佐清水港にはジョン万次郎ミュージアムがあり、中の浜には石碑とともに生家が復元されていた。現在、現地では NHK 大河ドラマに取り上げる運動がされており、賛同の署名をしてきた。

土佐清水港
ジョン万次郎ミュージアム

中の浜の記念碑

足摺岬のジョン万次郎像

復元された生家

話を元に戻そう。Rooney さんは Whitfield-Manjiro Friendship Society, Inc.の世話役で、日本に住んでいたこともあり、奥さんは日本人である。土佐清水にも何度か訪問をしたこともあるそうで、土佐清水のジョン万次郎ミュージアムに展示されていた新聞記事に彼が写っていた。1 人でフェアーヘブンを訪れていたら彼と出会うこともなかったであろう。思い切って貸し切りツアーとしてよかった。

なお、彼は私の高校時代からの友人とのかかわりなどもあり、世界は意外と狭い。Friendship Society の事務所には近所の奥さんたちがパッチワークをして、和やかな雰囲気のなか、「土佐日記」(高知の青柳製菓のお菓子で味もさることながら入れ物の箱が素晴らしい)の箱が何気なく置かれていたのが印象的であった。

フェアーヘブンから夕方ボストンに帰った。まだ時間があるので、ボストン美術館を見学した。あまり美術には興味を抱く方ではないが、世界的にも有名な美術館で日本をテーマとしたコーナーもあるという。何よりも驚いたのは、館内ほとんどの美術品の撮影が OK であったところである。日本ならもったいぶって撮影禁止が多いが、国の成り立ちによる文化の差であろうか？美術館の横には岡倉天心作の庭園があり無料で開放されていた。

モネの作品

ボストン美術館

岡倉天心庭園の門

その後、ボストンの街並みを少しぶらついた。この町でも　日本から進出したラーメン店はなかなかの人気で、私も今夜はラーメンをと考え、訪れてみたが、長蛇の列であきらめてしまった。ただ、この日はどうしてもラーメンの気分は抜けきらず、非常食用に日本から持参をしたカップ麺（チキンラーメン）をホテルで寂しくいただいた。町中のコンビニではこのようなカップ麺はよく売られているが非常用に一つ二つは持参をしてもよいかもしれない。

写真はコプリー駅周辺、新旧建物が並んだ風景が昔のボストンに今を感じさせる。レンタバイクのステーションは市内至る所にあり、2.5 ドルでレンタルできるようだ。

古い建物（図書館など）と近代的ビルが並ぶ
ホテル近くのコプリー駅周辺

7 月 12 日ボストンからモントリオール経由ロンドンへ
ボストン BOS16:00(AC8463)⇒モントリオール YUL17:14

某大統領のためか、この国での長居はやめて早々に次の目的地に向かう。ボストンの空港での出国に関して記憶が残っていない。どうも、搭乗手続き、セキュリティー検査だけで終わったのであろう？　出て行く分にはお構いをしないのがアメリカの流儀かもしれない。

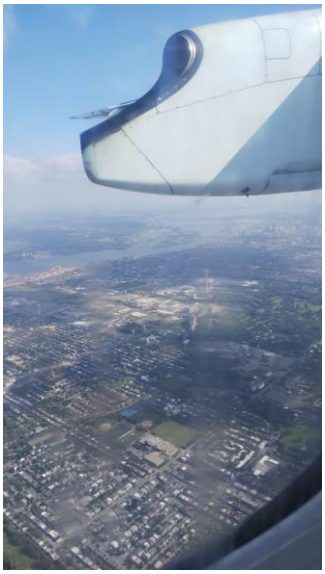
ボストンからモントリオールまではプロペラ機である。使用機材はボンバルディア 400 でよくボン Q の愛称で呼ばれている。大阪伊丹と高知間を飛んでいる 74 人

乗りの同じ小型の機材で、以前高知龍馬空港で胴体着陸をしたことで記憶している方も多いだろう。当然このフライトにはビジネスクラスの設定はない。この路線はユナイティド航空を利用した方がよかったかもしれない。

搭乗券

ボストン空港

モントリオール空港での乗り継ぎ時間はゆとりの 5 時間 30 分である。予定で行けば、この日（12 日）の 22:45 出発して、翌日の 10:25 のロンドン・ヒュースロー空港に着くことになっていた。アメリカに入国するときのようなタイトなスケジュールではなく、ラウンジでビールでも飲みながらフライトを待つ予定だった。このような場合、いわゆるマーフィーの法則は通用するらしい。いつの間にかフライトの変更で翌日の 00:50、さらにゆとりの 7 時間半、かくして「ラウンジ飲み」は続いた。エアーカナダのラウンジには焼き鳥と枝豆が定番のようである。日本では



ボン Q からの風景

焼き鳥と枝豆でラウンジ飲み

常識の範囲であるが、ビールのあて（つまみ）として最高の組み合わせであると、エアーカナダの上層部も気が付いたに違いない。そして、ビールはギネス(^^;

再び話はそれるが、お守り、キーホルダーなどは旅のお供によくバッグにつけて行く。今回の旅行には写真のようなキーホルダーをリックサックにつけて行った。私がよく行く、いや常連と言ってもよいだろう難波にある串カツ屋さん。本書の後半、そのことに触れるところがあるかもしれない。そこの飲みメンバー達の中にゆりやんレトリィバァさんの大ファンがいる。もちろん、彼女は関西のみならず、東京、そしてニューヨークでもメジャーなになりつつある吉本芸人である。そのお父さんが奈良県の吉野で表札やキーホルダーを制作する工房のオーナーである。出発の前、ひょんな行き掛かりから作ってもらうことになった。旅のちょっとしたタイミングで手に取ると、それとはなく和んでくるのはなぜだろうか。たかがキーホルダーされどキーホルダー。旅行前、娘からいくつかお守りをいただいた。今回の旅は「同行二人」いや、団体旅行かもしれないとふと思った。

夕日に映えるキーホルダー

モントリオール空港から　カナダの夕日